

初期佛教の業思想について

——相応部の一經典の解釈をめぐって——

舟 橋 一 哉

パーリ相応部一二・三七（二卷六四―六五頁）は短い經典で、その全文は次の通りである。

舍衛城に住したもう。

比丘等よ、この身 (kaya) は汝等のものでもないし、また他のひとびとのものでもない。比丘等よ、これは以前の業 (purāṇaṃ kammaṃ) の、造作せられたる (abhisankhataṃ) 意思せられたる (abhisanceta yitvaṃ) 感受せられたるもの (vedayitvaṃ) であると知らなくてはならぬ。

比丘等よ。これについて実に多聞の聖弟子はまさしく縁起 (paticcasamuppāda) を善く如理に思念する。これが有るときかれが有り、これが生ずるよりかれが生ずる。これが無いときかれが無く、これが滅するよりかれが滅する。例えば、無明に縁って行があり、行に縁って識があり乃至、このようにして此処に全苦蘊の集がある。

これに反して同じ無明の残りなき滅より行の滅があり。行の滅より識の滅があり乃至、このようにして此処に全

苦蘊の滅がある、と。

問題は「身が業である」ということを言っている箇所であるが、「造作せられたる」も「意思せられたる」も「感受せられたる」もすべて「業」と同格であるから、「造作せられたる、意思せられたる、感受せられたる以前の業」というように訳すこともできる。どちらに訳しても意味は同じであろう。そしてここに「以前の業」とあるのが「宿業」の原語であると思われる。いずれにしても「身」が「業」であるということは、後世の組織せられ体系化せられた佛教の業論の上からは、このままでは理解できない。それで佛音(Buddha-ghosa)の註を見ると次のように説明されている。

比丘等よ、これは以前の業であるとは、「これは以前の業そのものである」というのではない。そうではなくて、この身は以前の業より起れるものである。それ故に「縁」という「言葉の世間における」言い慣わしによって、このように説かれたのである。**造作せられたる**云々は、まさに「業」という「言葉の世間における」言い慣わしに基づいて、前なる「業の」特相と同類であるから、「そのように「身が業である」と」説かれたのである。それでここにおける意味は次のようである。**造作せられたるとは、思**〔すなわち業〕を根基とするものであると見るべきである〔と、いうことであり〕、**感受せられたる**とは受の根基であるとするべきである〔と、いうことである〕。 *Purāṇam idāni, bhikkhave, kammaṃ ti, na-y-idāni purāṇa-kammaṃ eva, purāṇakamma-nibbatta paṇ'esa kāyo. Tasmā paccaya-vohareṇa evaṃ vutto. Abhisankhātan ti adi kamma-voharass'eva vasena purima-linga-sabhaḡatāya vuttam. Ayam paṇ'etha atho : Abhisankhātan ti cetana-vatthuko ti daṭṭhabbo : vedayītan ti vedanāya vatthu ti daṭṭhabbo. Sar. II p. 70*

この解釈は、身は業そのものではなくて、業より生じた結果〔すなわち果報〕であるが、業から生じたものであるから、しばらく因について「業」という名を、果である「身」の上に立てた、というのである。いわゆる「果の上に

仮りに因の名を立てた」のである。「縁」という「言葉の世間における」言い慣わしによってこのように説かれたのである」というのは、おそらくそういうことを言うのであって、「縁」という言葉が、「縁」だけでなく「縁より生じた結果」をも含めて「縁」と称する、そういう言葉の使い方がその当時一般に行われていたことを言うのであろう。いまは「業」という言葉についても同様の使い方があることを言うのである。だから佛音は、「身は造作・意思・感受せられたる業である」ということを文字通りには解釈しないで、業すなわち思——南伝佛教では業の本質は思であるとする、そして思のはたらきは造作であり、意思である——を根基として身が生じ、その身を根基として苦楽の受が感受せられることになるが、その苦楽の受は実は果報として感受せられるのである、というように解釈したのである。この經典と同じ趣旨を伝える經典がもう一つある。それはパーリ相应部三五・一四五であって、関連する部分だけを抄出すれば次の如くである。

比丘等よ、以前の業 (puraṇa-kammam) とは何であるか。比丘等よ、眼は造作せられ (abhisankhata) 意思せられ (abhisācetayita) 感受せられたる (vedaniya) 以前の業である、と見なくてはならない。耳は……鼻は……舌は……身は……意は……比丘等よ、これが以前の業と言われる。

比丘等よ、新しい業 (nava-kammam) とは何であるか。比丘等よ、実に現在において (etarahi) 身・語・意をもって業を造るときは、比丘等よ、これが新しい業と言われる。 S. 35, 145 vol IV p. 132

この經典は漢訳に相当經典を欠いているが、俱舍論の中にはこれと同じ趣旨を伝える經典が引用せられている。そのことについては後に述べる。そしてこの經典に対する佛音の註釈は、だいたいにおいて前の經典の場合と同じであるが、ただ少しく異なっているのは「造作せられたる」と「意思せられたる」についての解釈であって、次のように言っている。

造作せられたるとは、諸縁和合して造られたる (paccayehi abhisamāgantva katan) である。意思せられた

二

このように佛音は、身や六根がそのまま直ちに以前の業ではないが、以前の業から生じたものであるから、「以前の業」と称するのである、と解釈する。これと同様の解釈は、北伝佛教においても見られるところである。例えば俱舍論四〔大・二九・二〇中〕において、「悪作」という名義に関連して、悪作というのは、悪く作されたことそのことを指して、「悪作」と称するのではなくして、悪く作されたことの結果として、それを追悔するところの心所のことであり、これは果の上において仮りに因の名を立てたのであるとして、そのような言い方の例として、次のように言う。

又た果の体において仮りに因の名を立つ。「此の六触処は、応に知るべし、宿作の業と名づく」と説けるが如し。

ここに引かれている經典は、さきのパーリ相應部三五・一四五と同じである。ここに「六触処」とあるのは「六処」のことであり、六処とは眼等の六根のことである。この小稿の初めに引用した相應部一二・三七の漢訳相当經典は雜阿含一二・一三であつて、そこには次のように説かれている。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまわく、此の身は汝の所有にも非ず。亦余人の所有にも非ず。謂く、六触入処なり。本と行願を修して此の身を受得せり。云何んが六と為すや。眼触入処、耳鼻舌身意触入処なり。彼の多聞の聖弟子は諸の縁起において善く正思惟して觀察す。……〔雜阿含一二・一三、大・二・八四上〕

ここには業のことは説かれていないが、この經典はさきの經典と深い関連があることは確かである。そこで問題を前へもどして、「身または六根は以前に造られた業である」ということの意味を考えてみたい。これについて、佛音

の解釈と俱舍論の解釈とを見てきたが、両者は同じであると見てよい。おそらく後世の組織化せられた佛教の業の教義の体系に当てはめて理解すれば、このように理解するより以外に適当な解釈方法はなかったであろう。ところで問題は、はたして相應部の經典、俱舍論が引用している經典を、經典そのものの立場に立ってみるとき、このように解釈すべきであるかどうか、ということである。これについてわたくしは、このような解釈は多分に後世の考え方に影響せられた解釈であって、經典みずからの原初の意味を伝えてはいないと思う者である。このようなもってまわった解釈をしないで、經典のことばをそのまま素直に見るならば、いったいどういうことになるであろうか。「此の身」は「造作せられたる以前の業」であり、「意思せられたる以前の業」であり、「感受せられたる以前の業」である、ということは、そこにどのような意味が示されているであろうか。

三

この經典において「業」について、「造作せられたる」と「意思せられたる」という二つの形容詞が附加せられているが、この二つは後世の佛教における業の教義の上からも、まさしく「業」についていわれるものである。しかし次の「感受せられたる (vedayita)」は、前述のように、後世の考え方からすれば「業」について言うものではなくて、業より生じた「果報」(vipaka)について言うものである。業によって果報を感ずることを説く縁起を「業感縁起」^③というが、そのときの「感」と同じである。パーリ相應部二・四六において *patisanvediyati* 「感受する」と言われているのが、これに当るであろう。漢訳はこれを「覺」と訳している。従ってここにいる「覺」は「さとる」ではなくて、「覺受」「感覺」の意味である。パーリと漢訳との両方の經典をならべて出すならば、次の通りである。

……かのバラモンは世尊に次のことを言った。「きみゴータマよ、「業を」造る者と「果報を」感受する者と
は同一であります(so karoti so patisanvediyati)か」と。「世尊曰く」「業を」造る者と「果報を」感受する

者とは同一人であるというのは、バラモンよ、これは一つの辺である、「〔バラモン問う〕」「ぎみゴータマよ、〔業を〕造る者と〔果報を〕感受する者とは別人でありますか」と。「世尊曰く」「〔業を〕造る者と〔果報を〕感受する者とは別人であるというのは、バラモンよ、これは第二の辺である。バラモンよ、如来は以上のこれら二辺を離れて、中によりて法を説く。無明に縁りて行あり……と。」〔相應部一二・四六、二卷七五―六頁〕

……云何んが瞿曇よ、自作自覚なり耶。佛婆羅門に告げたまわく、我れは説く、此れは是れ無記なりと。自作自覚は此れは是れ無記なり。云何んが瞿曇よ、他作他覚なり耶。佛婆羅門に告げたまわく、他作他覚は此れ無記なり。……〔雜阿含一二・一八、大・二・八五下〕

いま私が「〔業を〕造る者と〔果報を〕感受する者」というように、言葉を加えて訳したのは、わたくし自身の理解するところに依るのであって、佛音はこのことについては何も言っていない。しかし私は「感受する」というのは、「果報を感受する」という意味に理解しなくてはならないと思う。このように果報というものは「感受」すべきものであるということになると、果報はつねに「苦・楽」というすがたにおいて説かれなくてはならないことになる。

「苦・楽」は「受 (vedana)」の差別であり、そのような「苦・楽の受」によって特徴づけられた果報であるから、「果報を感受する」というのであろう。「善因楽果・悪因苦果」と言われることは、このことを示している。そしてここに「苦・楽」というのは、だいたいにおいて今日の「不幸・幸」という言葉に当るものと思われる。幸せな果報を感受するか、不幸せな果報を感受するか、ということである。しかし幸せと感ずるか、不幸せと感ずるかは、その人その人の受けとり方によることであって、絶対の幸せ、絶対の不幸せということは、少なくともこの世においては見出すことはできない。もしそういうものを考えるならば、涅槃のみが絶対の楽であって、それ以外のものはすべて絶対の苦である、ということになるであろう。このように考えてくると、「苦・楽の果報を感受する」ということのもつ原初の意味は、極めて唯心論的な立場に立って理解すべきものであったようである。ところが後の佛教になると、

そのような原初の意味が隠れてしまつて、果報を具体的な形をもつて示すようになる。例えば、王侯貴族に生まれるということは楽なる果報の一例とせられ、貧家に生まれるということは苦なる果報の一例とせられる。しかし王侯貴族の生活を楽なる生活、幸せな人生と受けとらない者もあるであろうし、反対に貧乏暮らしに甘んじてかえつてそこに幸せを感じている人があるかも知れない。そのような「果報」に対する考え方の発展・展開からして、「果報を感じる」という言い方から、次第に「果報を引く」という言い方に変つていったのではないであろうか。有部においては、人間とか餓鬼とか言うような総報を引く業を「引業 (aksapaka-karman)」と言つてゐるが、「果報は引かれるものである」とするところには、原初の業論に見られるような唯心論的なものは見られない。

四

さて、初めの經典にもどつて、「感受せられたる」「以前の業」という言い方は、後の佛教の立場からすれば、当然「果報」について言われるべきであるところの「感受せられたる」という言葉を、「以前の業」について言つてゐることになる。だから佛音も俱舍論も、ここに「以前の業」というのは「業そのもの」ではなくて、「業より生じた果報」のことである、と見たのである。後の佛教の立場からすればそれは当然なことである。しかしこの經典の意味を、經典それ自らの立場で理解するとき、果してこのように理解して問題は残らないであろうか。

そのことについては、スッタ・ニパータの中で、業について述べている次の偈を注意する必要がある。スッタ・ニパータは形式から言つても内容から言つても、現存の經典中、最古の層に属するものであるとせられている。

生れによつてバラモンなのではない。

生れによつて非バラモンなのでもない。

業によつてバラモンなのである。

業によって非バラモンなのである。(六五〇偈)

業によって農夫なのである。

業によって職人……商人……奴僕なのである。(六五一偈)

業によって盜賊でもあり、

業によって武士でもある。

業によって祭官でもあり、

業によって王でもある。(六五二偈)

賢者たちはこのように

この業を如実に知る。

〔彼等は〕縁起を見る者であり、

業とその果報 (vipakā) とを熟知している。(六五三偈)

ここで「果報」といわれているものはいったいどのような内容のものであろうか、というに、後世の佛教学でいうような「果報」とは、大変ちがった内容のものになる。おそらく農夫として耕作している者が農夫としての扱いを受け、世間の人たちから農夫として遇せられる。そういうことがここに「果報」という言葉で示されているものと思われる。それ以外、ここには何等果報らしいものが説かれてはいない。してみると農夫が耕作することによって生計を立てて生きている事実が、農夫の業^④でもあり、その業の果報でもある。業と果報とが極めて接近した形で説かれており、後世の佛教でいわれるような、時間的に截然とした区別が立てられてはいない。農夫として生きている事実を、「業」という立場から見ると、それはまさしく業に相違ないが、そのことをまた「果報」という面から伺うならば、それがそのまま業の果報でもある、ということになる。このように見てくると、この偈の意味するところ、さきの經

典に説かれていた「この身は以前の業である」ということの意味との間には、深い関連があるものと考えられる。その関連を考慮に入れて、この問題について、次のように考えることはできないであろうか。

「この身」というときの「身」は、「心を除外した身体」ということではなくて、「心を宿している身体」という意味であり、従って今日の「個体」という言葉と同じ意味をもつ。「この身」というと、「わたくしが人間としていま現に生きている事実の総体」である。それは過去の業すなわち行為的生活の蓄積であって、今まで私が人間として生きてきたことの総体が、今ここに「この身」としてあることになる。だから「この身は以前の業である」と言ったのである。しかも「この身は」——換言すれば「わたくしが人間としていま現に生きている事実の総体」は、苦または楽として感受せられるという一面をもっている。だから「感受せられたる以前の業」と言ったのである。スッタ・ニパータはそれを「果報」という言葉で表わしている。「果報」と言っても、後世の佛教学でいうような果報ではない。このように業と果報との間の関係を考えるのが「縁起」の意味するところである、とスッタ・ニパータはいう。

五

初めに引用した經典でも、それからスッタ・ニパータの偈でも、同じ意味のことを述べて「と私は考えるのであるが」、その次に「縁起」を出してくる。その「縁起」の出し方が少しく唐突の観を与えるかに見えるが、しかし両者ともに「縁起」に關説している以上、このことは看過できない、重要な意味をもっているものと見なくてはならぬ。すなわち、ここに縁起が説かれたのは決して偶然ではなく、必然の關係があつて、縁起に關説しているのである。その重要な意味、必然の關係とは何であるかといえ、私は十二縁起説の表わす意味も、このような「業と果報」の理解の線に沿って考えられなければならない、ということであると思う。十二縁起説についてはいまここで深入りする余裕をもたないが、関連する点だけを簡単に纏めて言えば、次の如くである。十二縁起説において、無明↓行↓識とい

うところに、心と生活との相関関係が説かれている。心によって生活があり、生活によって心がある。無明を相とする心が外に向って発動し、はたらきを起すことによって凡夫としての行為的生活「それを行という」が成り立ち、しかもそのような行為的生活によって、還ってまたその人の心が内容づけられ、色づけられていく。心は経験の蓄積である。「心は積集の義」と言われるのは、そういう意味である。そのように、心と行為的生活とが相互に影響し合いつつ発展していくところに、人間としての生存の実態があるが、それが無明を根柢としている凡夫にあっては、苦なる人生として感受せられる。そのことが、十二縁起説では「生」「老死」をもって示されたのである。私は、十二縁起説が言おうとする中心思想はここにある、と考えている。そうすると、このような見方はだいたにおいて先きの經典の意味するところと一致するであろう。だからこそこれらの經典では、きまって「縁起」に關説しているのである。

さて以上のように理解して、疑問はすべて解決したであろうか、というと、必ずしもそうではない。はたして積尊は、「業」と「果報」との間の關係をこのように説かれたであろうか。当時において、このような理解が一般に行われていたものとは思われぬ以上、積尊のこのような説き方は、極めて特異なものであったにちがいない。おそらく積尊も、在家の信者に対して在家道をお説きになるときは、当時一般に行われていた通俗的業論をお説きになったことであろう。とすると、このような特異な説き方のもつ意味はどこにあるのか。このような問題については、初期佛教の教義全体との関連の上から見ていかなくはならないと思われるので、これ以上のことは申し上げないことにして擱筆する。

① 南伝大藏經の訳は次の通りである。「比丘等よ、こは先業(一)によりて」造られしもの、「先業によりて」考えられしもの、「先業によりて」感受せられしものと知るべし。比丘等よ、されば聖弟子は縁起を聞きてよく思念するなり……」この訳は後世の解釈をそのまま採用したものである。なお「聞きて」は「多聞」の誤訳。suttavaを sutvaと見誤つた為である。

英訳は次の通り、

It should be regarded as brought about by action of the past, by plans, by volitions, by feelings.

Kindred Sayings, II p. 44.

② ここの vedaniya は vedaniya 「感受せらるべき」の誤りであるか、或は vedayita 「感受せられたる」の誤りであろうと思われるが、佛音の註釈でもこのようになっていたので、一応そのままにしておいた。和訳は vedayita と見ての訳である。しかし「感受」は普通果報について言われる言葉であって、その果報は業から生ずるのであるから、vedaniya とすべきであるかも知れない。

③ 「業感縁起」は、もと「業感縁起」とあったものの誤記による、という説があるが、「惑業縁起」ならともかく、「業感縁起」という言い方には疑問がある。

④ 同じスッタ・ニパータ六一二偈以下において、次のように言われていることによって、ここに言う「業」が何を意味するかが解る。

すなわち人びとの中で、土地を耕して生活をなす者はすべてこれ農夫であって、バラモンではない。

パーセッタよ、このようであると知れ。(六一二偈)

また人びとの中で、種々の工巧をもって生活をなす者はすべてこれ職人であって、バラモンではない。

パーセッタよ、このようであると知れ。(六一三偈)

また人びとの中で、売買をなして……商人であって……(六一四偈)

……他人に仕えて……奴僕であって……(六一五偈)

……盗みをなして……盗賊であって……(六一六偈)

……武術者として……武士であって……(六一七偈)

……司祭者として……祭司であって……(六一八偈)

……村や国を領有する者……王であって……(六一九偈)